

第 4 回計画策定（若者）部会 主な論点

1. 東京都の若者支援施策

- ・ 東京都若者総合相談センター「若ナビα」について
 - ・ 常時 7～8 名の相談員が常駐
 - ・ 電話相談 7,400 件 ・ メール相談 600 件 ・ 来所相談 140 件（概数）
 - ・ 相談経路の 1 位はインターネット、2 位は他機関からの紹介
 - ・ 相談内容の傾向は二極化しており、問題がこじれて解決までに時間のかかるケースと、話だけ聴いてほしいというもの
 - ・ 相談者としては、若者が多く、保護者からも少なくない
 - ・ メール相談も受けているが、相談が進みづらいため、できるだけ電話や来所につなげている結果、メールより電話が多くなっている
- ・ 若者の相談窓口を紹介するポータルサイト「わかぼた」
 - ・ 困難を抱える若者やその家族への支援を行っている都内の相談窓口を集約したもの
 - ・ 現時点で 212 の機関が登録
 - ・ 八王子では保健所、児童相談所、法務省年支援センターなどが掲載されている

2. 敷居の低い窓口とは

- ・ 「こんなことも相談していいのだな」とイメージしやすい窓口がよい
- ・ 地域福祉推進拠点の名称は「なんでも相談窓口」等に変えてもよいのでは
- ・ 市役所 1 階カウンター窓口のように、一時受付のような場所があるとよい
- ・ 若者にとっては、身近なところに相談窓口があっても敷居が高く感じるため、自宅で電話、メール、SNS などを活用した相談ができて、そこから来所につなげていくとよい
- ・ 若者は、宛名や署名など形式が煩雑なためメールは面倒に感じている
→ 入力フォームの記入欄を埋めていけば、相談までの手間がかからずよい
サポステの初回面談も同様の方式を取っている

3. 窓口や支援機関の周知

- ・ 東京都が作成して学校に配付されている、親しみやすく柔らかい印象の小さなカードは、相談しようかなという気になる
- ・ 一方で、学校現場では配付物が多すぎるとも感じている → 情報の一元化も課題
- ・ 八王子市のブランドメッセージ「あなたのみちをあるけるまち」を活かし、中学卒業後、成人後も皆さんの歩くみちを見守りますよ、と伝えつつ、「困ったときに開く本」というタイトルのパンフや小冊子を子どもや保護者に卒業式や成人式に持ち帰ってもらうと効果が高いのでは

4. 相談のきっかけ

- ・ アウトリーチも組み合わせるなど、本人に合わせた話しやすい場所で相談を受けられるのが理想
- ・ 「相談窓口」そのものに敷居の高さを感じる人もいる
 - 例えば「パソコン講座」を受けに来て、そこで相談員と顔見知りになって自然に相談につながっていく、という流れが多く、相談以外の活動ができる環境づくりは、若者にとって敷居が低くなるという意味では望ましい
- ・ 若者の中には、相談する人は「メンヘラ」と思われ、人の目を気にして相談しづらい風潮もあるので、「明るく」がキーワードとなる
- ・ 著名人が相談を呼び掛けると、親近感をもちやすく効果が高い

5. 居場所づくりについて

- ・ 従来の居場所は、お茶が飲めたり、トランプをしたりする沙龙的なイメージであったが、他の選択肢として、自己肯定感が上がるような、達成感が得られるような役割を持つ場所が若者にとっての居場所として必要
- ・ 高齢者のサロンと若者居場所をドッキングするのもよい
- ・ 中学生が小学生の運動会の手伝いに行く取組みがあり、中学生も自己有用感が得られている

6. その他

- ・ 引きこもりであれば、家族が相談に来ないと始まらないので、親への支援は重要
- ・ 親同士のネットワークがより多くあれば、情報交換や励まし合いができるので、ネットワークづくりのきっかけとして、講演会などがあればよい
- ・ 非行少年の保護者の会も月1回集まっていて、非行防止に役立っている
- ・ 大学生で深刻な悩みを抱える人は、人とのつながりがなくなり、学内に居場所がなくなってしまうので、学外に何らかの活動に参加できる場があるとよい

○ 第5回検討事項

中学、高校、大学等との連携について

- ・ 中学卒業時、進路未決定者への支援
- ・ 高校、大学等現役学生の状況や中退者への支援
- ・ 支援が途切れないよう、つなげていくためにはどうすべきか。若者サポートステーションなどとの連携の可能性